

マレーシア滞在二十二週目、帰国の日を間近に控え、自分がなぜ留学を志し、そしてこの国に来て実感出来た事についてまとめてみたい。

自分は大学に入って参加したカヌーサークルを通し、発展途上国の為の排水処理技術に関わりたいと考えるようになった。元々は4年で卒業し就職するつもりで居たのだが、排水処理を専門とする企業への訪問を繰り返すうちに発展途上国とは何かをこの目で見てみたいという衝動が芽生え、それに突き動かされて留学を決意、相談した担当教員から紹介して頂いた先がMJITだった。

自分の留学の目的は途上国を知ることだった。つまり、マレーシアという国で、発展途上国が先進国に何を求めているのか、それに対して自分に何が出来るのかを知ることだった。

クアラルンプールは思っていた以上に賑やかで活気があり、実家よりもよほど発展した街だった。滞在している間に通学途中の駅までの歩道は舗装され、新たな高層ビルが街中で幾つも幾つも建設されていた。消費税導入によりモノレールやエクスプレス等の交通費が値上がりし、国の政策改善を巡ったデモがあった。このようにたった半年暮らしてただけでも、一目で違いに気付けるほどに日々成長していた。

当然、急激な発展に伴う問題は山積みだった。膨れる人口及び生活水準の向上に伴う環境負荷を処理するインフラの更新が発展に追いついていないため、水質汚染や大気汚染、廃棄物の処理など様々な問題が顕在化していた。ごみと油が浮かぶ川、何かのパッケージやビニール袋が散乱した街道、空を覆うヘイズ。これら私にとっては異常と思える環境が彼らの日常だった。

一言で言ってしまうえば彼らの環境意識が低いということになるのだろう。事実マレーシアに来た当初の自分がそのように思っていた。彼らが環境を蔑ろにしていることに憤りを感じていたし、環境破壊が引き起こすものを知っているはずなのになぜか思っていた。しかしながらマレーシアでの半年間の生活を通して、この考え方に変化があった。

事実として彼らの環境意識は低だろう。この場合の環境意識とは自らが環境へと与える負担に対して責任を持つとする意志という事だが、彼らは環境への負担よりもより利益を生み出す事を優先している。そういった意味で彼らの環境意識が低いというのは正しい。しかしそれが彼らの罪になるかと言えばそうではないと思うようになったのだ。

上にクアラルンプールは都会だと書いたが、それでも少し郊外に出ればその日を暮らす事に必死な人々がまだ大勢いる。より良い生活を求めて日々を過ごしている。その結果が環境汚染に繋がっているとは言え、生活の向上を目指すことが悪いとは言えない。実際日本もかつては彼らと同じ様に環境を犠牲に国の発展を望んできた。そして公害という過去を経験して振り返る余裕が出来た国に育ったからこそ自分のように「環境は大事にするべきだ」などと汚染された環境を見て憤る余裕があるのだ。彼らだって当然問題には気づいていて、現状を変えたいという思いもある。それでもまだ日本のように環境を振り返るほどの余裕を持ってない彼らが、将来環境が与える影響ではなく今の発展を優先してしまうのは当たり前の事なのだ。

故に先進国がすべき事、また私自身がこれから行うべきは彼らが環境へと与える被害への批判や意見の押し付けではなく、過去の経験から開発した技術を彼らの国の発展を阻害しない形、利益を生み出せる新たな技術として彼らに提供することであり、一方的に援助或いは支援を受けるのではなく、共に利益を得て発展していける姿こそが発展途上国と先進国の目指すべき相互扶助のあり方なのだと留学を通して実感することができた。そして自分で見つけることが出来たこの答えは将来の指針として、私の目標になってくれるだろう。小倉



コタキナバルからモーターボートで片道10分ほどの距離にあるマヌカン島でシュノーケリングをしてきた。目が覚めるような透き通った海とそこに並ぶサンゴ礁を見て、この自然を後世にも変わらずに残していけるよう努力したいと感じた。